

W・E・B・デュボイスのパン・アフリカニズム

竹本友子

はじめに

アメリカ黒人のインターナショナリズムは、たとえばアフリカやハイチへの移民運動のように、19世紀にも見られたものであるが、20世紀前半の2度の大戦直後には、とりわけ高揚した。それぞれ国際連盟、国際連合というアピールの場が誕生したことが大きな刺激となったのである。

この2度の高揚期のどちらのときにもパン・アフリカ運動で主導的、もしくは少なくとも重要な役割を果たしたのが、W・E・B・デュボイス（W. E. B. Du Bois）である。デュボイスは第一次大戦直後の1919年、パリ講和会議が行われているさなかに同地で第1回のパン・アフリカ会議（Pan-African Congress）を組織し、その後も1921年、23年、27年と各地でパン・アフリカ会議を開催し、第二次世界大戦後の1945年秋の第5回会議にも参加した。⁽¹⁾

ところで、パン・アフリカ会議の研究者の間では、第5回会議をそれ以前の4度の会議とは異質なものととらえ、この会議が開催された1945年をパン・アフリカ会議の転換点とする見方がほぼ定説となっている。たとえばパン・アフリカ会議の歴史を詳細に研究し、多くの論文を発表した小田英郎氏は、「パン・アフリカニズム運動の歴史は、質的に異なる二つの時期にこれを大別しよう」として、デュボイスからジョージ・パドモア（George Padmore）らに会議の主導権が移行した1945年の第5回会議を「最大の転換期」としている。⁽²⁾第二次大戦期から戦後の黒人の反帝国主義・反植民地主義運動の盛衰を論じたフォン・エシェンは、1945年の時点でデュボイスやハロルド・ムーディー（Harold Moody）らの「妥協的」で「エリート」的なグループとパドモアら階級意識の強い急進的なグループが存在したとして、両者を対比させている。⁽³⁾

たしかにパン・アフリカ会議の実態や結果、すなわち参加者の出身地や社会的背景、決議や宣言の内容を比較すれば、そのような見方は妥当である。しかしながら、各会議におけるデュボイスの意図や自己評価、それに基づいたその後の取り組みなどに目を向けるなら、第5回のパン・アフリカ会議はそれまで4回の会議と断絶しているわけではなく、その会議の延長線上にあることが理解できる。言い換えれば、第5回会議はデュボイスが長年にわたって模索してきたパン・アフリカ会議の理想的な条件がかなりの程度実現したものであり、であるからこそ会議主催者としての主導権を奪われたにもかかわらず、喜んでこれに参加したのである。

本稿では、まず第1回から第4回までのデュボイスのパン・アフリカ会議への取り組みを、とくに彼がどのような点に意を用いたかということを中心に振り返る。そして1945年の第5回会議の時点では、デュボイスのパン・アフリカ会議に求めたものがパドモアラと多くの点で共通していたことを述べ、最後にデュボイスにとってパン・アフリカ運動がどのような意味をもつものであったのかを明らかにしたい。

1. 1945年以前のパン・アフリカ会議

ここではデュボイスが主導的な役割を果たした4度のパン・アフリカ会議について、各会議の詳細よりもデュボイス自身の意図や結果に対する評価を中心に見ていく⁽⁴⁾。デュボイスのインターナショナリズムは、すでに19世紀末の時点で、アフリカとアメリカの黒人を共通の歴史や理想をもつ一つの人種集団として認識していたが、さらに第一次世界大戦の頃には、合衆国の黒人差別を先進資本主義国による全世界的な有色人抑圧の一環として位置づけていた。⁽⁵⁾ウィルソン大統領が民主主義のための戦争と位置づけた第一次大戦の終結は、デュボイスを含む多くの黒人に期待を抱かせた。デュボイスによれば、「世界中の黒人、とりわけアフリカの黒人の権利を求め」声がアメリカの黒人の中に高まり、集会がもたれた。⁽⁶⁾

デュボイスは黒人兵士の状況を調査するべく全米有色人向上協会（National Association for the Advancement of Colored People, 以下、NAACPと略記）によってフランスに派遣されることになったが、同時にこの機会を利用してパン・アフリカ会議を開催する計画をたてた。戦争直後にそのような会議を開催することは困難をきわめたが、セネガル出身のフランス下院議員ブレイズ・ディアニュ（Blaise Diagne）がクレマンソー首相と交渉した結果、開催にこぎつけた。57名中12名がアフリカ人であったが、このような黒人の動きを警戒した植民地宗主国やアメリカ政府によるビザ発給拒否という妨害もあって、参加者の多くはフランス在住者であった。そのため「パン・アフリカ」という名にふさわしいものとはならず、デュボイスも「この会議はアフリカを部分的にしか代表していなかった」と認めている。⁽⁷⁾

開催に尽力したディアニュのフランス政府寄りの姿勢もあり、採択された決議文は穏健であった。具体的な要求としては旧ドイツ領植民地の委任統治や、アフリカ人の福利のための常設機関の設置などがあげられる。デュボイス自身はのちにこの会議に関して、自分のプランには「華々しいものや革命的なもの」はなく、アメリカとヨーロッパ諸国の圧倒的な力を前にして自分が望んだのは、有色人の仲間と協力して同じテーブルに座り、「お互いについて、われわれの境遇、われわれの野心、われわれの一致協力した考えや行動の機会について」知ることだったと述べている。これは会議の成果の乏しさに対する自己弁護のように聞こえるが、パン・アフリカ会議を第一にこのような情報交換の「場」としてとらえるデュボイスの姿勢は、その後も一貫していた。⁽⁸⁾

問題は会議におけるアフリカ人の影の薄さとエリート主義で、シカゴ・トリビューン (Chicago Tribune) 紙によれば、デュボイスは「民族自決の原則は文明化されていない民族には適用できないが、教育のある黒人はドイツ植民地の処理に関して発言権をもつべきだ」と述べたといわれる。この会議の後につくられた国際委員会のメンバーとして名を連ねていたのは、イギリス人1名、グアダルルーペ人2名、フランス人3名、アメリカ人6名で、その偏りは明らかであった。そのためパン・アフリカ会議はアフリカでの支持を得られず、1920年にはイギリス領西アフリカ国民会議の黒人たちが、同組織はデュボイスらの会議とは何ら関係がないと伝えてきた。デュボイスは「アフリカの人々に対するアメリカ黒人のリーダーシップ」への反発と解釈したが、このことはデュボイスの心に残るものとなった。⁽⁹⁾

第2回のパン・アフリカ会議は、1921年8月から9月にかけてロンドン・ブリュッセル・パリの3か所で開催された。この会議は前回のほぼ2倍の参加者を集め、しかもアフリカからの代表が全体の3分の1を上回ったため、デュボイスは「真にパン・アフリカ的と呼ばれるに値する」と評価し、またおおいに世間の注目を集めたと述べている。⁽¹⁰⁾ この会議では最初のロンドン・セッションで採択された決議がベルギーの植民地支配への批判を含んでいたため、多数の白人聴衆が会場を占めたブリュッセルで反対の声が沸き起こり、ディアニューによってなかば強引により無難な別の決議に差し替えられるという混乱が生じた。妥協の結果、決着はパリでの会議に持ち越され、最終的にロンドン案が多少の修正を加えた上で採択されるということになった。その内容は冒頭で普遍的な人種の平等を高らかに宣言しているものの、各国の黒人政策に対する評価も、アメリカを除いてそれほど厳しいものではなかった。⁽¹¹⁾

デュボイスはこの会議が直面した困難として、大戦後の革命や混乱、経済不況の中で、このような運動に対して各国の圧力や批判が存在したことと、当時急速に影響力を拡大していたマーカス・ガーヴィー (Marcus Garvey) の運動と混同され、疑いや攻撃を受けたことを指摘している。デュボイスらのパン・アフリカ運動がポリシェヴィキと結びついている、という批判さえ起ったのであるが、この会議を開催するにあたり、デュボイスがアメリカのヒューズ国務長官に対して、パン・アフリカ会議はガーヴィーとは無関係であり、決して危険なものではない、と説明したのはこのような状況のためであった。当時はパン・アフリカ会議の開催自体、さまざまな圧力に抗し、ときには妥協をしなければ可能ではなかったといえる。⁽¹²⁾

この会議の成果として、国際連盟に対し、国際労働局に黒人労働者の問題を扱う部局を設けることや、委任統治委員会に欠員が生じたときには黒人を補充することなどを求める請願を提出したことがあげられる。これはジュネーヴにデュボイス自ら足を運んで好意的に迎えられたものの、要求が実現されることはなかった。⁽¹³⁾

デュボイスは、パン・アフリカ会議は1921年の第2回以降「衰退した」と述べている。先に述べた困難に加え、直接的な原因としてはパリの事務局との意見の相違や財政難があげられるが、

デュボイスはNAACPを含むアメリカ黒人の関心の低下やアフリカへの嫌悪感の存在も指摘している。⁽¹⁴⁾当初1923年に予定されていた第3回会議はパリの事務局により延期が提案されたのであるが、デュボイスはなんとか同年内にロンドンとリスボンで開催にこぎつけた。デュボイスによれば、第2回より小規模で、その意義についてはとにかくパン・アフリカ会議の理念を保ったことだ、としている。⁽¹⁵⁾

注目されるのはこのときにロンドンでイギリス労働党のメンバーと会合をもったことで、デュボイスは黒人労働者と白人労働者の連帯を力説したが、反応は鈍かった、としている。しかし、次の第4回パン・アフリカ会議に関するプレス・リリースで、黒人に労働組合への加入を促し、白人労働者に対しては黒人が差別されているかぎり白人労働者の向上もありえないと述べていることとあわせて、デュボイスが当時労働運動に関心を向けつつあったことがうかがえる。⁽¹⁶⁾

デュボイスはのちに第3回までのパン・アフリカ会議の歴史をふりかえって、「これまでパン・アフリカの理念は依然としてアフリカのというよりアメリカ的であった」と述べているが、運動におけるアフリカの要素の欠如はデュボイスにとって最も気になっていた点であり、そのため1925年には会議の開催地をよりアフリカに近づけるとする意図のもとに第4回会議を西インド諸島で行う計画をたてた。具体的には船をチャーターしてカリブ海地域の各地で会合をもつ、というものであったが、費用の点で折り合わず、実行できなかった。⁽¹⁷⁾

結局第4回パン・アフリカ会議は2年後の1927年8月にニューヨークで開催された。参加者自体は増加したものの、アフリカからの直接の参加者は減り、デュボイスによればゴールド・コーストやシエラ・レオネ、リベリア、ナイジェリアからわずかな出席者を迎えたのみであった。この会議に参加していたリチャード・B・ムーア (Richard B. Moore) は、カリブの若い「急進主義者」が参加していたと回想している。決議において有色人種に対するソヴィエト政府の「リベラルな態度」に謝意を表明している点や、先ほど述べたプレス・リリース中の白人労働者に対する呼びかけが含まれている点が目を引くが、デュボイス自身はこの第4回会議をパン・アフリカという理想を維持するための「やや空疎な身振り^{ジュエスチャー}」と自虐的に表現している。⁽¹⁸⁾

この後パン・アフリカ会議をアフリカで開催したいという積年の夢を実現すべく、1929年にアフリカのチュニスで開催する計画を立てたが、フランス政府の拒否と大恐慌により挫折した。その後第二次大戦末期まで、デュボイスの側ではパン・アフリカ会議に関して何らの進展もなく、運動についての問い合わせを受けた際に、会議が今も存在しているのかどうか「確信がもてない」と答えるありさまであった。⁽¹⁹⁾

この間、ロンドンでは西アフリカ学生同盟 (West African Students' Union, 以下、WASU と略記) のようなアフリカ人組織が影響力を広げ、またのちに第5回パン・アフリカ会議開催の主体となるパン・アフリカ連盟 (Pan-African Federation, 以下、PAF と略記) につながる組織も誕生し、I・A・T・ウォレス・ジョンソン (I.A.T. Wallace Johnson) やジョモ・ケニヤッタ (Jomo

Kenyatta)、そしてパドモアらがパン・アフリカニズムを育てつつあった。一方のデュボイスも、パン・アフリカ会議に関する具体的な進展はなかったものの、1923年の第3回会議の後に西アフリカを訪問して、アフリカの新たな動向を感じ取っており、「アフリカ人自身が植民地政府により多くの発言権を要求しはじめて」いることを確認した。⁽²⁰⁾ディアスポラの黒人が結集するのは時間の問題であった。

2. 第5回パン・アフリカ会議

第二次世界大戦は、ヨーロッパの植民地保有国の力を弱め、各地で民族主義の発展を促した。また、ナチスの人種主義の否定は、少なくとも理論上有色人種に対する人種差別の正当性を失わせた。したがって、その多くが植民地支配に苦しむ有色人にとって、これまでにない機会が開かれたことになる。デュボイスは帝国主義と人種差別は密接に関連しており、有色人種にデモクラシーがもたらされないかぎり、普遍的な平和の確立は不可能であると考えていたが、反帝国主義や反植民地主義および全有色人種の連帯の必要の認識は、左翼から保守派まで多くの黒人指導者に共有されていた。のちに冷戦の深化とともにアメリカの対外政策への批判を控え、パン・アフリカ運動にも冷淡になっていく NAACP のウォルター・ホワイト (Walter White) も、この時期にはたとえそれが戦略的なものであったにせよ、インターナショナリズムの立場を公言していた。⁽²¹⁾

上杉忍氏は、冷戦の開始と赤狩りに先立つ戦争末期の1944年、45年は市民的自由に関して「例外的に良好な時期」だったとしているが、第5回パン・アフリカ会議はまさにこの時期に計画され、実行された。ローレンが指摘するように、戦争はパン・アフリカ運動にも「刺激を与えた」のである。⁽²²⁾

路線をめぐる対立とホワイトとの確執から1934年に NAACP を離れて10年後、再び NAACP に復帰したデュボイスに期待されていたのは「アメリカ黒人や世界中の有色人のために、講和会議に提出する資料を準備すること」、すなわちその豊富な学識を見込まれての文書作成であったが、デュボイスはその一方で、NAACP という組織をフルに利用して、戦争が終わりしだいパン・アフリカ会議を復活するつもりであった。早くも1944年の初めに西インド諸島の A・J・ガーヴィー (Amy Jacques Garvey) やムーディのグループから接触があり、彼らと連絡を取りつつ、小規模な集会を重ねて戦争の終結を待っていた。⁽²³⁾

ところが1945年の3月17日、シカゴ・ディフェンダー紙上でパドモアがパン・アフリカ会議の開催を呼びかけているのを知り、すぐに連絡をとった。そして自分も同様の計画をもっており、すでにムーディや WASU にも連絡をとっていることを告げ、パドモアが6か月後のパリとしている開催場所と時期について、その頃はたして大規模な集会をパリで行えるかどうか見通しがなく、またパン・アフリカ会議は「アフリカで開催すべき」だと主張した。さらにデュボイスはパ

ドモアの呼びかけに会議の宣言が含まれていたことについて「決定的な声明は会議の前でなく後で出すべきだ」と批判した。しかしその後ほどなくCIOのヘンリー・L・ムーン（Henry L. Moon）から、パドモアらロンドン・グループの決定に関して詳しい経緯を知る。すなわち、2月にロンドンで開催された世界労働組合連盟（World Federation of Trade Unions, 以下、WFTUと略記）の大会にアフリカ各地の多くの組合代表が参加していたことから着想を得たものであり、WFTUが再び9月にパリで大会を予定していることから、これに場所と時期をあわせればパン・アフリカ会議にも多くのアフリカ人の出席が見込まれるということであった。⁽²⁴⁾

パン・アフリカ会議をアフリカで、というデュボイスの長年の夢とは相いれなかったものの、アフリカの労働組織の代表が多数参加できるということは、デュボイスにとって十分な説得力があった。彼が「とくに切望」していたのはアフリカの代表が「真に大衆の支持を得た幅広い基盤」から選ばれてくること、すなわち本当に現地の住民を代表していることであったからである。デュボイスはムーンから情報を得た直後にパドモアに対し、彼らの「希望と考え方を理解し、それを完全に支持」として告げ、開催時期に関しても「考え方を変えた」として、全面的に賛成している。こうしてパドモア・グループの計画に合流することを決めたデュボイスは一転して積極的になり、労働組織との提携をしる保守派のムーディに対して、そのことで多くの参加者が期待できること、また人種問題はたんなる人道問題ではなく、経済的・政治的な問題である、と説得を試みている。したがって、本稿の冒頭で触れたように、デュボイスとムーディをひとくくりに扱うフォン・エシエンの見方は妥当性を欠く。この後デュボイスは、パドモアと何度か連絡をとって会議の名称などについて調整を行い、性急にことを進める彼らに若干の不快感をもちつつも、この会議が「アフリカの人民の自由と自治のためにアフリカ系の人々を結びつける」ものであるゆえに、強く参加を希望した。⁽²⁵⁾

実際の第5回パン・アフリカ会議は1945年11月にマンチェスターで開催された。デュボイスはパン・アフリカ運動の「父」として敬意をもって迎えられ、複数の会議の議長を務めるとともに、パン・アフリカ会議国際議長という肩書を得た。植民地主義を明確に否定してアフリカ人の自決権を主張し、闘争を呼びかける会議の戦闘性は、小田氏が指摘するようにデュボイスを十分満足させるものであった。⁽²⁶⁾

3. デュボイスのパン・アフリカニズム

前述のように、第二次大戦末期には世界中の黒人の連帯を唱えるインターナショナリズムが顕著に現れていたが、国際連合というインターナショナルな組織ができたことで、自分たちの主張を広く伝えるという、いま一つのインターナショナリズムの可能性も広がった。アメリカ政府は国連の創設に熱心であったが、国際連盟への不参加という経験にかんがみて、国民の幅広い支持を得るために、サンフランシスコの国連創設会議に民間人を顧問として参加させることを決めた。

そしてNAACPからもホワイトに加え、メアリー・マクラウド・ベシューン（Mary Mcleod Bethune）とデュボイスが補佐役として選ばれた。彼らはアジアやアフリカ、カリブ海地域の代表と連絡を取り合い、国連憲章に人権を擁護し、人種差別を否定する文言を付け加えさせることに成功した。⁽²⁷⁾

デュボイスがとくにこだわったのは、国連を構成するのが「国家」という単位であり、したがって植民地人民の声が反映されないことであった。この点について彼はサンフランシスコ会議へのアメリカ代表団のメンバーひとりひとりに手紙を書き、また上院の外交委員会に対しても植民地の人々の声なんらかの形で国連に代表されるよう働きかけ、さらにNAACPやアフリカ問題評議会（Council of African Affairs）等に国連への請願を出すことを提案した。この結果、多くの団体の支持のもとにパン・アフリカ会議の名前で1946年9月18日に請願書を提出した。⁽²⁸⁾

こうした国連への働きかけや前述の第5回パン・アフリカ会議開催をめぐるパドモアラとのやりとりから、デュボイスが何を重視したかということが浮かび上がってくる。国連であれパン・アフリカ会議であれ、彼は当事者の声を正確に反映（代表）することにこだわっていた。パン・アフリカ会議に関していえば、過去4回の会議におけるアフリカ性の希薄さへの反省をふまえて、アフリカでの開催にこだわった。それはアフリカの人々の声、しかもその大多数を占める労働者・農民の声が会議に反映されることを望んだからであり、パドモアラとのやりとりを通じて彼らの組織がアフリカの労働団体とつながっていることが確認できたからこそ、デュボイスは計画への賛成に転じたのである。彼は会議の開催前に「もしこの会議がうまくいけば、おそらくこれまでよりも多くのアフリカ人の参加が見込まれ、イングランドや西インド諸島の有色人が重要な役割を果たすにせよ、会議を推進する力はアフリカ自身から生まれる」だろうと期待を寄せるとともに、「過去の会議は専門職業人や知識人を代表していたが、この会議はアフリカ人の組織労働者をも代表することを約束している」と指摘し、成功すれば画期的なことだとしている。⁽²⁹⁾

これほど第5回のパン・アフリカ会議を評価していたデュボイスであるが、彼はそれを「黒人のデモクラシーへの偉大な行進を始めるためのアフリカの人々と世界中のアフリカ人の子孫による、より広範な運動と真の努力に向けての第一歩」と位置づけた。また、のちには「有色人の民族主義に基づくアフリカのパン・アフリカ運動が現在のアフリカ問題への最終的な解答だとは思わない」が、それは「始まり」であるとも述べている。⁽³⁰⁾

デュボイスにとってパン・アフリカ会議はあくまでもひとつの「場」であった。であるからこそ、そこで代表されるのが誰なのかということに最も関心があったのであり、顔ぶれが変わればそこから導き出される結果、つまり決議や宣言の内容も必然的に変化する。大類氏が指摘するように、デュボイスにとってパン・アフリカニズムの主体はあくまでもアフリカ人であったから、アフリカにこだわるのは当然のことであったが、それが「パン・アフリカ」であるかぎり他の地域の黒人も代表されるという多様性が確保されなければならない。カリブ海地域出身のムー

ディに参加を促したのもそのためであるし、パドモアに対しても、「会議の成功のための絶対条件」として強調しなければいけないのは、それが「英国の」会合にならないということ、つまりイギリス領以外のアフリカ人や他地域の黒人の「利害や意見」を無視しないようにと釘をさしている。そして、これらの地域からの代表は少ないか、あるいはまったくいないかもしれないが、「すべてが完全なるパン・アフリカに数えいられる」と述べている。⁽³¹⁾デュボイスにとっては、パン・アフリカ会議もデモクラシーを実践する場であった。

おわりに

第5回パン・アフリカ会議でアフリカの若い後継者たちにイニシアティブを譲った後も、デュボイスのパン・アフリカ会議への関心は衰えず、知遇を得たアフリカの指導者たちとアフリカでの会議開催の可能性を追求し続けた。1948年にはエチオピア政府の外交官に対して、同国でパン・アフリカ会議を開催したいという希望を述べているし、親しくなったパドモアとはしばしば連絡をとりあい、アフリカでの会議開催の可能性を探った。1954年には早期の開催を「心から希望」し、デュボイス自身は当時アメリカ政府によってパスポートを差し止められていたことから「おそらく出席するためのパスポートは得られないだろうが」それでも試してみる、と強い意欲を示している。アフリカ民族会議（African National Congress）のW・M・シスル（W.M.Sisulu）とも連絡をとりあったが、その中で実現のためにはできることがあれば何でも協力をすると約束し、アフリカ全土のアフリカ人組織と連絡をとることを勧め、リストを送ってくれば自分も手伝うとまで述べている。⁽³²⁾デュボイスにとってパン・アフリカニズムは終わりのない旅であった。

注

- (1) 1900年にトリニダードのヘンリー・シルヴェスター＝ウィリアムズ（Henry Sylvester-Williams）によって、ロンドンでパン・アフリカ会議（Pan-African Conference）が開催され、デュボイスもこれに参加して「20世紀の問題は皮膚の色の境界線の問題である」という有名な言葉を含む決議文を書いた。しかし、通常この会議はいわゆるパン・アフリカ会議の中には数えられず、デュボイス自身も重要視していないことから、ここでは扱わない。Philip S. Foner, ed., *W. E. B. Du Bois speaks : Speeches and Addresses*, vol.1 (New York: Pathfinder Press, 1970), p.125. この会議については、小田英郎「W・E・B・デュボイとパン・アフリカニズム—1900年から1919年までの時期を中心として」『法学研究』43-10（1970）（以下、「デュボイ」と略記）274 - 278頁を参照。
- (2) 小田英郎「第2次大戦後におけるパン・アフリカニズム運動の展開について—マンチェスター会議から『パン・アフリカニズムの祖国』ガーナの独立まで—」『アジア経済』15-2（1974）、2頁（以下、「第2次」と略記）；同「移行期のパン・アフリカニズムとジョージ・パドモア—カリブ海の一パン・アフリカニストの思想と行動」矢内原勝・小田英郎編『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』（平凡社、1989年）所収（以下、「移行期」と略記）183頁。
- (3) Penny M. Von Eschen, *Race Against Empire: Black Americans and Anticolonialism 1937-1957* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1997), pp.9, 45-46.
- (4) 会議の詳細については、注（1）（2）であげたもののほか、小田英郎「前期パン・アフリカニズムの盛衰

- とアフリカ・ナショナリズム—いわゆる「第二回」パン・アフリカ会議（1921年）から「第四回」パン・アフリカ会議（1927年）までの時期を中心として—『法学研究』44-3（1971）（以下、「前期」と略記）549 - 573頁；Clarence G. Contee, “Du Bois, the NAACP and the Pan-African Congress of 1919,” *Journal of Negro History*, 57-1(1972), pp.13-28などに詳しい。ほかに大類久恵「アメリカ黒人史における汎アフリカ主義とディアスポラ意識—マルコム X とガーナを結ぶための予備的考察—」『城西国際大学大学院紀要』13（2010）、11 - 28頁；David L. Lewis, *W.E.B. Du Bois: The Fight for Equality and American Century 1919-1963* (New York: Henry Holt and Company, 2000; Manning Marable, *W.E.B. Du Bois: Black Radical Democrat*(Boston: Twayne Publishers, 1986) も参照。本稿はこれらの先行研究から多くの示唆を得た。
- (5) 竹本友子「初期デュボイスの人種意識—『人種の保存』を中心に—」『史観』127（平成4）、56 - 68頁；同「W・E・B・デュボイスとアフリカ」『西洋史論叢』（早稲田大学）16（平成6）、1 - 14頁を参照。
- (6) Du Bois, *The World and Africa* (New York,1947), in Henry Louis Gates, Jr., ed., *The World and Africa and Color and Democracy* (New York: Oxford University Press, 2007)（以下、*W&A* と略記）、pp.5-7.
- (7) Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay Toward an Autobiography of a Race Concept* (New York,1940,new ed.,Oxford University Press: New York,2007)（以下、*DD* と略記）、p.131; Du Bois, “The Pan-African Movement” (1945), in Philip S. Forner, ed., *W.E.B. Du Bois Speaks: Speeches and Addresses*, vol.2(New York: Pathfinder, 1970)（以下、*PA* と略記）、p.165; 大類、15頁; 小田「デュボイ」284 - 285頁。
- (8) *DD*, p.137.
- (9) Du Bois, *W&A*, p.6; The Second Pan-African Congress, Bulletin I (March 1921), in Herbert Aptheker, ed., *A Documentary History of the Negro People in the United States*, vol.2(New York: Citadel Press,c1951)（以下、*Doc.* と略記）、p.336; Du Bois, *The Autobiography of w.E.B. Du Bois: Soliloquy on Viewing My Life from the Last Decade if Its First Century*(New York: International Publishers, 1968, new ed., Oxford University Press, 2007)（以下、*AB* と略記）、p.260; 小田、「前期」563頁。
- (10) *DD*, p.138.
- (11) *W&A*, pp.150-151; “To The World,”in *Doc.*,pp.337-342.
- (12) *DD*, pp.138-139; Du Bois to Charles Hughes (June 23, 1921),in Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W.E.B. Du Bois*, vol. I (Amherst: University of Massachusetts Press, 1973), pp.250-251.
- (13) *Crisis* 23(1921.11), p.18; Lewis, p.48; 小田「前期」562頁。
- (14) *PA* p.175; 小田、「前期」566 - 567頁；*DD*, pp.137-138.
- (15) *Crisis* 27(1923.12), p.58.
- (16) *AB*, p.173; Press Service of the N.A.A.C.P., in *Doc.*,pp.548-549.
- (17) *W&A*, p.153; 小田、「前期」569頁。
- (18) *PA*, pp.174-175; 小田、「前期」569 - 570頁。小田氏は実際にはゴールド・コーストやナイジェリアからは代表が送られなかったと推測しているが、ムーアはこれらの地域からも出席があった、としている。Richard B. Moore, “DuBois and Pan Africa,” *Freedomways*(1st quarter,1965),pp.182- 183; *Crisis*, 34(1927.10)pp.263-264; *DD*, p.140.
- (19) *W&A*, p.154; Du Bois to George Finch(February 11,1941),in Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W.E.B. Du Bois*, vol. II (Amherst: University of Massachusetts Press, 1973)（以下、*Correspondence II* と略記）、p.277.
- (20) 小田、「移行期」を参照；*DD*, p.139; *W&A*, p.217.
- (21) 竹本友子「W・E・B・デュボイスと第二次大戦後の公民権運動」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』46、第4分冊（2001）（以下、「公民権」と略記）、74 - 75頁。
- (22) 上杉忍『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』（講談社、2000）、201頁；Paul Gordon Lauren, *Power and Prejudice* (Boulder: Westview Press, 1988), 大蔵雄之助訳『国家と人種偏見』（TBS プリタニカ、1995）、218-

219頁。

- (23) White to Du Bois(May 17, 1944), in *Correspondence II* , p.409; *AB*, p.221; Garvey to Du Bois (January 31, 1944), in *The Papers of W.E.B. Du Bois* (以下、*Papers* と略記), reel 56, frame 104; Du Bois to Garvey (February 9, 1944), Garvey to Du Bois(April 4, 1944), Du Bois to Paul Robson (April 7, 1944), Du Bois to Moody (April 7, 1944), in *Correspondence, II* , pp.375-378; W.A.Hunton to Du Bois (January 23, 1945), Du Bois to Hunton (January 23, 1945), in *Papers*, reel 57, frame 387-388.
- (24) Du Bois to Padmore(March 22, 1945), in *Papers*, reel 57, frame 1028; Moon to Du Bois(April 9, 1945), in *ibid.*, reel 56, frame 1342 ; 大類、20-21頁。
- (25) Du Bois to Lapido Solanke(April 17, 1945), in *Papers*, reel 56, frame 670; Du Bois to Padmore(April 11, 1945), Du Bois to Moody(April 11, 1945), in Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W.E.B. Du Bois*, vol. III (Amherst: University of Massachusetts Press, 1973) (以下、*Correspondence III* と略記), pp.60-62 ; Du Bois to the Acting Secretary General of WASU (September 14, 1945), in *ibid.*, p.75.
- (26) Moore, p.183. 小田「第2次」12頁。会議の詳細については、同論文を参照。
- (27) ローレン、229 - 232頁；竹本、「公民権」75頁。
- (28) Du Bois to The American Delegation(May 16,1945), in *Correspondence III* , pp.10-12; Du Bois to Senator Tom Connally(July 2, 1945), in *ibid.*, p.15; Du Bois to Oswald Garrison Villard(July 24, 1946),in *ibid.*, pp.149-151; 請願の内容は *ibid.*, pp.154-156.
- (29) Du Bois to John P. Lewis (September 17, 1945), in *ibid.*, pp.85-86.
- (30) *W&A*, p.154; Du Bois to Robert C. Bennett(February 16, 1954), in *Correspondence III* , p.355.
- (31) 大類、16頁； Du Bois to Padmore(September 12, 1945), in *Correspondence III* , p.83.
- (32) Du Bois to Ras Imru(September 13, 1948), in *Correspondence III* , p.212;Padmore to Du Bois(March 21, 1951), Du Bois to Padmore(April 11, 1951), in *ibid.*, pp.311-313; Padmore to Du Bois(May 29, 1951), Du Bois to Padmore(July 10, 1951), in *ibid.*, pp.315-317; Du Bois to Padmore(December 10, 1954), in *ibid.*, p.375; Sisulu to Du Bois(March 23, 1953), Du Bois to Sisulu(April 9, 1953), in *Papers*, reel 69, frame 438-439.